



筑紫女学園大学リポジト

THE CONSIDERATION OF XIEGUOMING & HAKATA

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/160

謝国明と博多についての一考察

崔 淑 芬

THE CONSIDERATION OF XIEGUOMING & HAKATA

CUI SHUFEN

はじめに

古代から多くの中日の知識人や官吏、特に民間人が海を渡り、互いに文化・思想・教育・医学・科学技術・農産業・生活風俗など広範囲に亘って、様々な交流を行ってきた。この連綿として絶えず、悠久な歴史を持った中日間の往来は、両国の友情を繋ぐ、こころの架け橋のような存在としてだけでなく、独特な東洋文化を形づくってきたのである。この中日交流の歴史の中で、中国から来て日本で亡くなったり、また、中国で亡くなったが日本に来たことがある、というような波瀾万丈の生涯を送った中国の思想家・政治家・学者・留学生、あるいは一般民間人は少なくなかった。彼ら、或いは彼女たちを記念するため、墓や石碑がつくられた。そのうち、多くのものは日本人の手でつくられた。ある地域では、これらの人々を記念するため、年中行事として祭さえ行われている。

本論は、宋の帰化人、博多に住んだ貿易商人、綱首と称された謝国明を取り上げ^{註1)}、調査した資料、現場で撮った写真、碑文の内容に基づいて、史的な視点から、謝国明の来日経緯、博多との関係、影響などを考察したいという試みである。

一、承天寺の創設

960年に成立した宋(960~1279)は貿易を振興する目的で各地に市舶司を設置し、日本、朝鮮との貿易や南海貿易を行った。日本では太宰府の監督のもとで鴻臚館貿易が行われていたが、大宰府は平安時代になると機能が消失したわけではないものの衰微する。日中間の正式の外交貿易は行われず、一般人の渡航は禁止され、宋の商人は主に博多や越前敦賀へ来航し、私貿易が行われていた。やがて博多を中心として、それに隣接する筥崎、香椎あるいは仁和寺領怡土荘にあった今津、更には肥前の平戸、有明海沿岸の神崎荘、薩摩の坊津など九州の各沿岸で貿易が行われ且つ宋人の居住区が出来、都市的様相を呈していくようになった。また宋人のなかには荘園の荘官などと婚姻関係を結んだり、権門寺社などの神人になる者も現れたため管理貿易が見事に崩れていった。そしてこのころには中国商船のみならず日本商船も大陸へと渡航し貿易を行うようになった。宋からは、香料、絹織物、陶磁器、薬品、書籍などの物品の他、喫茶の風習や建築の技術、絵画の手法などの文

化ももたらされた。日本からの輸出品は、金、真珠、水銀、イオウ、材木、刀剣など。また、商船に便乗渡航した僧侶は、天台山などの巡拝の後に帰国し、新興の禅宗を伝えた。当時の貿易港としては、大輪田泊（現在の神戸港）・和賀江津・六浦および九州地域の博多である。^{注2)}

博多は、九州北部筑前国地区船に築かれた博多湾に面する港湾都市であり、古代からの歴史を持つ。古く「那津」「荒津」「灘津」「冷泉津」「筑紫大津」と呼ばれていた博多湾は、797年（延暦16年）の『続日本記』において「博多大津（博多津）」と記されているのが見出される。「ハカタ」の語源は、「土地博人・物産多し」という言葉から「博多」、大鳥が羽を広げたような地形から「羽形」、海外へ出る船の停泊する潟から「泊潟」、射た鶴の羽が落ちたとして「羽片」（鶴の墓は太宰府にある）、切り倒された大樹の葉が舞い落ちたので「葉形」などの説がある。8世紀の海外の文献にも「覇家台」「八角島」「花旭塔」との記述があり、どれも「ハカタ」に近い音を発する。この当時の「博多」というのは現在の博多湾に面する一帯を指すものであった。

博多は何といっても、外国との交渉および外来文化の受容、摂取の窓口であった。博多湾を天然の良港とし、玄界灘を挟んで中国大陸・朝鮮半島と向き合う地理的条件のおかげで、古くから対外交流の門戸として栄え、日本の歴史と文化形成に大きな役割を果たしてきた。古くは「奴国」や「那の津」と呼ばれた地域で、博多という名称が最初に確認されるのは『続日本記』である。759年の、太宰府から朝廷への戦備強化を訴えた進言の中に、「博多大津」に船が足りないということで登場している。また、中国の古代の書物では博多が「覇家台」「八角島」などの字が当てられており、朝鮮の古い地理誌には「覇家台」のほか「石城府」「冷泉津」「筥崎津」などの名で呼ばれていたことが記されている。諸地名説紛々であるが、「島」「津」などの名から見れば、内外船の泊まる潟が訛ったとされ、博多商人の多くは船を操り、貿易取引で商業を発展させてきた。536年、大和朝廷は大陸との外交を行なうため、那の津のほとりに官家を建てた。また、外国使節を接待するため、鴻臚館を設置し遣唐使や入唐僧の宿泊の場として役立てた。『万葉集』に「大君の遠の御門」と記載されている当時の太宰府は、海外貿易を全面的に中央から委任され、博多も通商貿易の場に指定された。『武備志』には、博多には多くの宋商人が住まい、「大唐街」という中国人の町もあったと記している。現在の博多にある奥堂・石堂川・辻堂などの地名は守人百堂の名残りを留めている。中世において、対外交流の機能は主として寺社によって行なわれた。中でも代表するのが聖福寺・承天寺を始めとする禅宗寺院である。このような意味で、中近世博多の禅宗寺院の歴史は、日本文化史における基礎を成しているのである。承天寺の歴史で注目すべき点の一つは、やはり国際関係、国際交流のそれである。^{注3)} 博多三刹の一つである承天寺は1242年に建立され、今の博多駅前一丁目にある。承天寺は栄西（1141～1215）を開山とする聖福寺とともに鎌倉期の博多発展の核となった。1975年、韓国新安沖の海底から引き揚げられた沈没船から鈎寂庵の銘がある木簡が発見され、承天寺が対外交流にかかわっていたことが証明された。

承天寺は臨済宗東福寺派、山号は万松山、開山は円爾（弁円）、開基檀越は綱首の謝国明と太宰府少貳の武藤氏。1515年9月の史料によれば、承天寺創建の折、謝国明は筥崎八幡宮領である筑前国那珂郡の野間・高宮・平原（福岡市）を購入して承天寺に寄進したという。

宗教史・都市史からみれば、聖福寺の創建により博多海浜に禅と戒を基調とする宋風の伽藍が現れ、都市的景観に変化をもたらす端緒をつくったことになるが、承天寺の創建は、一層宋風の強い兼修禅を博多にもたらし、国際都市博多は一步進んで、宗教状況を豊かにしたのであった。また、日本の対外交史上重要な役割を占めるとともに、南北朝時代には諸山に、室町時代には十刹に列せられ、かつては塔頭たっちゅう四十三といわれていた。重要文化財として木造釈迦如来および両脇侍像・絹本着色禅家六祖像・朝鮮鏡がある。1243年、円爾の恩師である無準師範（1178-1249）の径山万寿寺が火災に遭った時、謝国明は木材一千枚を贈っており、無準師範やその弟子たちの再興事務に従っていた徳敷が謝国明に宛てた感謝の書が残っていて、それは国宝・重要文化財となっている。1248年、承天寺が焼失した時も、謝国明は仏殿など十八棟の建物を再建させた。

この大貿易商の謝国明の名とともに、国際都市博多の一端が垣間見えるのが『六波羅書下』ろくはらしよげである。時の六波羅探題・北条長時が、六波羅奉行人へ宛てて書いたもので「……小呂島に謝国明の跡地がある」と記載されている。この玄界灘に浮ぶ小呂島は周囲わずか3.4キロメートルの小島であるが、大陸や半島貿易の航路上にあり、貿易船にとって目印あるいは拠点の役割を果たした。謝国明はこの小呂島に地頭じとう職を持ち、社役を務めていた。彼は綱首・船頭・日本綱使などと称されているが、綱首というのは船や船荷を所有し、しかも自ら船長として船に乗り込んで貿易に従うものである。謝国明の財力を示すのは承天寺の建立、小呂島の地頭職だけでなく、博多の社会、風俗行事、そして食文化にも大きな影響を与えたことである。対外貿易の拠点博多に禅寺承天寺を綱首が建立したことは、いかにも相応しいことであったと言えよう。^{注4)}

さまざまな博多文化の「原点」がここに集っている。博多祇園山笠の起源は諸説あるが、最も有名なのは「聖一國師起源説」である。

前述した聖一國師しょういちこくしべんえん弁円（1202-80年）は福岡に崇福寺、京都東山に東福寺を建立したほか、豪商であった謝国明の寄進により承天寺を創立した臨済宗の僧侶である。禅を学ぶため宋に渡っていた弁円が帰国した1241年、博多の町では疫病が流行し多くの人々が苦しんでいた。弁円は疫病から博多の町を救うべく、人々に担がせた施餓鬼棚（お盆の時に供物を載せる棚）に乗って甘露水を振り撒いて、疫病退散を祈願し、博多の町を清めて回り、見事に病魔を退散させた。そのうち博多の町では施餓鬼棚の上に人形を飾って弁円の功德を称えるようになり、それが山笠の原型となったということである。今でも毎年追山では、承天寺の前に清道旗が設けられ、住職が見守る前で清道を回るのである。

國師は、出家を志した最初は天台宗を修行しているので、平癒きとつの祈禱をされたのでしょうか。も一つ類似の説は、櫛田神社で行った。櫛田神社は博多人にとっては今でもなじみの所。全国三大夏祭りとして知られる博多祇園山笠は円爾と櫛田神社から興り、七百年以上の伝統を誇る。かつて、博多に疫病がはやった時、円爾は博多総鎮守である櫛田神社で祈禱し、従士に戸板（施餓鬼棚）を担がせてこれに乗り、町中に聖水を振りまいて疫病を収めた。この故事にちなんで博多祇園山笠の祭りが始まったという。神仏習合の一話であるが、今でも山笠祭りのフィナーレの毎年七月十五日（追い山という）、櫛田神社から走り出た山車が必ず承天寺参りをするのは以上の縁起があるからだ。

博多を拠点に大陸貿易で活躍した宋商の謝国明は櫛田神社近くに居住していたといわれる。

現在の山笠は、クライマックスである追い山のコースは約5キロ。地図でこのコースを見ると3つのヘアピンカーブが有ることに気づく。山笠は舁き手が山を持ち上げ、後押しと呼ばれる人達が後ろから押して前へ動く。追い山そのものがタイムレースのようなものだから、カーレースのように運転技術を競う見せ場があってもおかしくはない。ということで3つのカーブに迫ってみよう。笠の目的は、タイムレースをすることではない。山笠に出る人達は「山笠を奉納する」という。つまり、博多の総鎮守、産土神である櫛田神社に山笠を奉納するために、この清道をまわるのである。山笠は「博多祇園山笠」というのが正確な言い方であり、祇園祭りの一種。つまり、祇園社の祭りである。その後山笠は時代の流れの中で、勇壮な迫力で博多町人の心意気を表現してきた。また博多の町を石堂流（恵比寿流）・呉服町流・須崎流（大黒流）・土居流・西町流・東町流・魚町流（福神流）の七つの「流」という区画単位に分け、消防などに活躍する自治組織として構成した。これが博多旧七流の始まりで、現代に続く「流」の基礎となった。このような流のなか1955年には博多祇園山笠振興会ができ、博多の山笠を一層盛り上げる形ができた。1960年福岡県の文化財に、1979年には国の無形文化財に指定された。様々な歴史を経てきた祇園山笠はまた、県外や海外でも活躍するようになった。1990年、大阪で開かれた「国際花と緑の博覧会」では二本の山笠が参加し、1994年には京都の平安建都千二百年を記念した「全国祇園山笠巡行」にも参加した。海外では1956年、シカゴでの国際見本市に飾り山が展示されたのを始め、1980年にハワイで行なわれた「アロハ・ウィークフェスティバル」に舁山かきやまが参加した。また、2004年には、舁山一本が海を渡って中国上海にお目見得し、南京路を疾駆して大歓迎を受けた。博多祇園山笠は現在、山笠振興会を中心に、数百人から数千人以上で構成されている七つの流によって運営され、参加者の総数は五千人を超えている。この「博多山笠発祥之地」の碑は、承天寺の勅使門前にある。

また、饅頭まんじゅうも博多に初めて伝わったと言われている。聖一国師が自らから、茶屋の主人栗波吉右衛門くりはきちえもん さかまんじゅうに酒皮饅頭の製法を教え、看板用に自ら筆を執り「御饅頭所」の書を与えたといわれている。帰国後の聖一国師の在博は足かけ三年足らずだったが、謝国明との交流はその後も続き、博多の文化のみならず、日本対外文化交渉史に大きな足跡を残した。^{注5)}

謝国明は禅への理解をもち、絵画を愛好するなど教養の高い人物でもあった。彼の教養、崇仏、禅への理解、故国南宋の宗教（無準師範の禅）を日本に移植し挙揚したいという熱意、そのうえ、貿易商人として富力があつたからこそ、承天寺は建立されたのである。いまだに残る伝承のように、謝国明は博多に南宋の生活文化をかすかすもたらしたが、建立された承天寺は、謝国明ら同寺をささえる博多綱首たちの対外貿易に、国際的信用やいろいろな便益を与えたと思われる。

承天寺の境内には「饅頭蕎麦発祥之地」うどんそばはっしょうのちという石碑も建てられている。

聖一国師は1235年、宋に渡って禅を学んだが、謝国明とは1241年にともに出帆して博多に帰着したという間柄であった。聖一国師は、羊羹や饅頭の作り方を初めて日本に伝えたといわれる。博多にとって、謝国明と聖一国師、承天寺は忘れてはならない組み合わせである。「そば」と言えば謝国明から始まったとされているのである。年越しそばのことを博多では「運そば」と言う。大晦日

には年越しそばを食べ、来る年の平安を祈る習慣は、「大楠様」と博多の人々が敬愛を込めて呼ぶ謝国明まつわる逸話である。

鎌倉時代のある年、博多の町は飢饉と疫病流行のため多くの人が亡くなり、生きている者も餓死寸前、まさに困窮の極みにあった。町民は年を越す元気もなかったが、大晦日に謝国明は承天寺に人を集めて、私財を投じて町民を飢餓から救い、宋から持ち帰り蓄えていたそば粉と麦粉で作った「かゆ餅」を振る舞った。かゆ餅とは今の「そばがき」のこと。元気を取り戻した博多の人々は、それ以来大晦日に「運そば」を食べるようになったというのである。

現在約六十店が加盟している福岡そば組合は、謝国明の慈悲深い行いと同じように、そばを通して毎年ボランティア活動を行なっている。毎年11月の第二日曜日に、在宅や施設の心身障害児（者）にそばやうどんを差し入れているという。

祭りは約700年前に始まったとされ、周辺住民を中心に続けられる伝統行事で、住民の減少で行事の継続が危ぶまれる中、元住民やボランティアらの協力で存続しているという。江戸時代に黒田氏が入国し那珂川を挟んで城下町福岡を築き、二極都市の性格を持つことになる。明治時代には博多・福岡をまとめて1つの市、福岡市として市制施行されて現在に至り、博多の地名は博多区として残る。大宰府の外港であった博多津には鴻臚館が存在し、鴻臚館貿易が行われるとともに、遣唐使が経由地として訪れていた。757年（天平宝字元年）に櫛田神社が創建。806年（大同元年）に唐より帰朝した空海は博多に東長寺を建立している。平安時代末期から、後世「大唐街」と呼ばれる中国人街が菅崎宮周辺に形成された。異国風の建物が建ち並び、多数の外国人商人が行き交う国際都市であった。

平安時代の終わり頃になる、鴻臚館での官貿易は衰え、博多に住みついた宋商人による私貿易が始まった。彼らは住吉神社・菅崎宮など寺院神社や荘園領主らの私貿易による日宋貿易の拠点となった。有力な寺社や貴族と結びつき、積極的に貿易活動を行なった。こうして、宋人は船団を組んで盛んに往来し、博多に居を構え、寺社とも結び付いた。近年宋銭の発掘調査により、当時の日宋貿易は栄え、宋銭が流通していたことが判明している。博多は宋人居留区が形成され国際都市として繁栄した。^{注6)}

中国においては、唐末、中国の商人たちの海外への進出がすでに始まった。宋朝に入ると、商品生産の盛行、都市の発達によって、貿易が一層発展したのである。特に、貨幣（主に銅銭）の取引の増大に伴い、海外にも大量に流出した。対外貿易は日本・高麗・インドネシアなどアジア諸国だけでなく、アフリカにまで及んでいる。一時期、「宋商」という言葉が、海外に周知されたほどである。彼らは博多に居住して活発な商業活動を行い、博多の寺院とも結び、その力は中央にも及んで特に「博多綱首」と称されるに至った。その代表的人物が有名な謝国明である。

謝国明（1192～1280）は南宋の臨安府（今の杭州）の出身。日本名は綱首謝太郎国明。十三世紀初頭に、博多にやって来て、櫛田神社（福岡市博多区）のそばに居を構えていた。自分の船団をもち、博多を拠点として日本と南宋間の貿易にしたがっていた豪商である。宋商人は彼のことを「綱首」と称する。「綱」とは中国語で、「ごう」と読み、旧時、一団になって貨物を輸送する組織

を意味した。つまり船主と船長、貿易商を兼ねたオーナー的存在である。宋の時代（日本では平安後期～鎌倉時代）、中国大陆と博多の間に、船団を組んで盛んに往来し、日中貿易で巨万の富を築いた。「武備志」によると、博多はかつて大唐街という中国人の町があったと記載されている。多くの宋の商人がそこに住んでいた。^{注7)}

博多綱首、つまり宋人の貿易商たちの存在と活躍が、当時の日本に及ぼした影響力は決して小さなものではない。それどころか、日本人の精神文化史上、特筆すべきものがある。例えば中国からの禅宗の移入である。いわゆる鎌倉禅が確立したところの、古代社会を終焉させ、中世の幕開けをもたらしたのは鎌倉政権だが、彼ら鎌倉武士の精神的な依りところは執権・北条時頼や時宗に見られるように禅宗（臨済宗）であった。その禅宗の日本への招来に尽力したのが博多綱首たちである。

臨済宗の開祖、栄西は、岡山の人。博多綱首の船に乗り、二度目の入宋から帰国後、1195年（建久6年）、博多に日本初の禅寺「聖福寺」を創建した。聖福寺の寺伝によると、栄西は帰国後、将軍・源頼朝に寺院の建立を願い出、保護を得たとある（『栄西申状』など）。博多の中世の地名に「宋人百堂」というのがある。宋人が建てた百のお堂という意味だが、この地がそっくり聖福寺の寺域に寄進された。栄西の自著の中に「博多津の宋人、張国安が尋ねて来て、中国杭州の禅師のメッセージを伝えた」旨の文章がある。当時、博多一帯には「張」姓の宋人たちが数多く住んでいた。栄西はこの張一族の支援を得て、帰国後、聖福寺の建立に取り掛かった というのが真相のようだ。^{注8)}

栄西は中国からお茶を持ち帰り、日本中に広めたことでも知られるが、なかなかの遣り手で、時の幕府の女帝・北条政子を通じて京都にも建仁寺を建てると、臨済宗の基盤を確固たるものにした。

聖福寺は今でも現存する。JR博多駅から港の方（北側）に歩いて十分ほど。寺域二百メートル四方の広大な境内には八百年の時を刻んだ伽藍配置が古刹のたたずまいを色濃く留めている。だが、創建時には、寺域はこの四倍はあった、といわれるから改めて驚く。

博多三刹の一つである承天寺は、聖一国師の開山になるが、工事一切を担当したのは謝国明であった。聖一国師は、鎌倉中期の臨済宗の僧円爾^{えんに}、諱は弁円^{べんえん}、諡は聖一国師といい、駿河国安倍郡藁科（静岡市）の生まれ。諸国で仏道修行に励んだ後、宋（中国）留学の志を抱き、謝国明の援助を得て念願の入宋を果たしたのは、博多へ来てから二年後の嘉禎元年（1235）のことだった。六年後の仁治二年（1241）七月、聖一国師は多くの典籍を携え、謝国明と一緒に中国を出帆して博多に帰着した間柄。博多に帰ってきた。謝国明は私財をなげうって承天寺を建立し、円爾は同寺の開山となった。承天寺は福岡市博多区博多駅前一丁目にある寺。臨済宗東福寺派。山号は万松山。

聖福寺に続いて宋風の強い兼修禅が博多にもたらされた。日本の対外交渉史上重要な役割を占めており、南北朝時代には諸山に、室町時代には十刹に列せられている。かつては塔頭四十三といわれていた。1889年（明治22年）、九州鉄道の開設などに伴って境内地の一部を譲渡し、寺域は変貌した。重要文化財として木造釈迦如来及両脇侍像・絹本着色禅家六祖像・朝鮮鐘がある。

以上のように、承天寺は、栄西を開山とする聖福寺とともに、鎌倉期の博多発展の核となった。綱首の寺として、国際都市博多の貿易機能になったのである。それは、韓国西南海岸木浦市北西の新安海底沈没船が直接、承天寺にかかわる貿易船であった事例をあげるだけでも明らかである。

聖一国師即ち5才から修行を始め弁円は嘉禎元年（1235年）に34才で宋に渡る。

宋での6年の間に天竺僧・柏庭月光から経を授かり、径山の万寿寺・無準禪師から印可証明を授かります。中国での修行時に、禅を始めとした多くを学び、この承天寺に多くのものを伝えている。聖一国師は、宋で学んだ禅の思想を広める傍ら、日本や博多の文化に多くの影響を与え、その足跡を残しました。その代表的なものに麵、饅、羹と共に「古文書水磨の図」に残る製粉の原理は、今日の製粉技術の根幹をなすものと云われる粉挽きの技と共に庶民の常食として粉食の手法の原点を伝承の技として残されました。承天寺に建つ二つの石碑が、その一端を物語っています。一つは「饅餛蕎麦発祥地」の碑、もう一つは「山笠発祥地」の碑である。前者は国師が宋から持ち帰った製粉技術を記す図面「水磨の図」によって、うどん、そば、饅頭などの粉食文化が広まったことを今に伝えています。

聖一国師は宋から製粉技術や水車を動力にした製粉技術は設計図も持ち帰っており、このとき、うどん、そば、まんじゅう、ようかんなど、粉食の原点ともいべき製法が日本に伝わったため、承天寺の境内には「饅餛蕎麦発祥の地」記念碑が建っている。その当時のうどん、つまり「切り麦」の製法こだわり、博多湾に浮かぶ^{のこのしま}能古島で製造されているのが、幻のうどん「古式切り麦、能古うどん」である。

謝国明は、筥崎宮の社領の一部を購入して承天寺に寄進し、その経済的基盤を固めている。それは、社役を介して筥崎宮に帰属関係をもち、貿易活動の保護をうけていたことが背景にあったとみられる。また、宗像社にも帰属していたのであるから、対外貿易活動を活発に行っていた両大社に複数の帰属関係をもっていたのである。

謝国明の財力は相当なものであったようで、櫛田神社にも協力を惜しなかつた。宝治二年（1248年）に承天寺が火災にあった時、彼は「一日にして仏殿など十八堂を再建させた」と伝えられている。

承天寺の境内は道路により仏殿（覚皇殿）のある南西部分と開山堂、^{ほうじょう}方丈、石庭のある北東部分に2分されている。それで仏殿（覚皇殿）などを見学し、道路を渡り中門を入ると、左に饅餛蕎麦^{うどん・そば}発祥之地の碑と博多織りの技術を中国の宋から持ち帰ったという満田弥三右衛門之碑があり、右に開山堂（常楽院）がある。開山堂（常楽院）は普通、一般公開されていない。奥に方丈という建物がありその前が洗滌庭^{せんとうてい}という、すばらしい石庭になっている。



(1) 謝国明像



(2) 承天禪寺

(於 博多駅前一丁目)



(3) 山門の脇にある由緒書き



(4) 勅賜承天禪寺



(5) 博多観光地案内



(6) 大楠さま

(於 博多承天寺)



(7) 謝国明の記念碑
(於 博多承天寺)



(8) 餛飩蕎麦発祥之地の碑
(於 承天寺の通用門の右側)



(9) 山笠発祥地 石碑
(於 承天寺の通用門の右側)



(10) 大楠様千灯明祭
(於 博多承天寺)

二、謝国明を偲ぶ

謝国明は日本に帰化し謝太郎くにあき国明と名乗りました。日本に針治療を伝えたと言われ、また飢饉のときには博多の人々に蕎麦を振る舞いこれが年越し蕎麦の起源とも言われています。

彼は商人としての道徳を忘れず、貧しい庶民に食糧を与え、針灸や造船技術を教えた。また、貧民の救済を行い、さらに、博多っ子の血を湧かせる「博多祇園山笠」は1243年（寛元元年）、博多に疫病が流行った時、「聖一国師が弟子に昇かせた施餓鬼せがきだな棚に乗り、町中に聖水をまいてまわり、疫病を退散させた。」という逸話をその起源としている。

ある年の大晦日、飢饉と悪疫で飢えに苦しんでいた博多の町民に、蓄えていたそば粉や麦粉を持ち出して、承天寺境内でそばがきを振舞った。博多では、年越しそばと言わず、運そばと呼ぶが、その由来は、この時の謝国明のふるまいからきているという。

謝国明が飢饉や疫病の時、縁起直しと称して蕎麦がきを振舞ったところ、翌年は運が上向いたそう
で、以来大晦日にそばを食べるようになったそうだ。運そばの名はその時の名残でしょうとのこと。

「古式切り麦、能古うどん」は博多を発祥の地として広まった「切り麦」を現代において再び、
博多から全国に広めようと生まれた。

謝国明は八十八歳で亡くなったが、彼を記念するため、承天寺に墓と記念碑が作られた。調査の
ため、筆者は二回承天寺を訪れた。一回目は謝国明の墓と記念碑を探しに行った。承天寺は博多駅
から歩いて十分程の距離で、そこに一步足を踏み入ると庭のほうき目も清々しく、博多の都心と
は思えない肅然とした静寂なところである。ここには博多織を創始した満田弥三右衛門や、新派演
劇の始祖、オッペケペー節の川上音二郎の墓があることでも有名である。承天寺は立派な山門・勅
使門・仏殿・伽藍があり、乳峰寺・天與庵・宝聚庵・祥勝院等四寺からなっている。謝国明の墓の
場所を聞くと、「博多駅前一丁目出来町口の大楠にある」と教えて下さった。承天寺から南に曲っ
て歩くと、「謝国明の墓」と「博多観光地案内」の看板が見えた。その看板には「建久二年（1193）
宋で生れた謝国明は、帰化して綱首謝太郎国明と言い、櫛田神社の近くに住んで日宋貿易に従事し、
聖一国師を助けて承天寺を建てた。また、針治療を教えたり、貧民の救済を行い、八十八歳でなく
なった」と書かれている。

看板の右に二本の細長い石柱で作られた入口がある。鉄の扉を開けると、目の前に大きな幹だけ
の楠の木が聳え立っている。謝国明の墓を、この四抱えぐらいある樹齢七百年の大楠が包みこんで
いたそうだが、終戦前後の近火で楠が枯れた。今は枯木の幹でかこまれ、新しい楠の木が植えられ
ている。仙崖和尚せんがいおしょうの筆による供養塔も建てられていた。枯れた巨木で、高さ5メートル、上部はず
でに無いが、その傍に成長した二代目の楠の幹から枝と葉が繁茂し、傘のように庭園を覆っている。
昼の晴れた日でも中は暗く感じる。地元の人々は「大楠さま」と親しみをこめて呼んでいる。調べ
たところによると、1833年、謝国明の墓は五層の石塔で建てられ、墓の傍に楠の木を植えた。その
後、楠の幹が太くなり、成長するうちにこの五層の石塔を包み込んでしまっ、墓前祭もできなく
なった為、同所の楠樹の側に謝国明の記念碑を建てたのである。このことについては、約170年前
の天保時代に、青柳種信あおやぎが編集した「筑前国続風土記拾遺ちくぜんのかくにぞくふうどきしゅうい」に楠の木に囲まれた記述があった。

石碑は灰色の石で、形は自然のままのものを使った高さ約1.8メートル、「謝国明碑」の文字がうっ
すらと見える。碑文はほとんど風化しており、不鮮明な文字から判断すると、謝国明の身分と貢献
を刻んだものようである。どうしても、碑文をはっきりさせたく、歴史にも残して欲しいので、
承天寺に二回目にお邪魔にして、やっと、幾多の資料の中から碑文の内容を探しあてた。

「謝国明は、宋国臨安府の人で本邦に帰化し、博多櫛田神祠の近くに居を構えていた。その職業
は綱首であったが、崇仏の念深く濟生救民の志が篤かった。博多津中の窮民を憐み、しばしば金品
や食物を施与し、また、鍼薬しんやくの術を心得ていて、熱病の治療を施した。かねがね一禅刹建立の念願
があり、大宰少式武藤資頼しやうにむとうすけよりに請うて霊地を博多東偏に寄捨をうけていた。四条天皇の仁治中、聖一
国師が宋より帰国したので、謝国明は喜び迎え承天精舎を建立し、国師を請じて開山祖師とした。
謝国明は弘安三年十月七日歿したので、寺の東境に葬り墓石を建てた。後世に至るも博多津中の人々

は、その徳誼を慕って香華を供え、礼祀する者が絶えない」。

その碑文から、謝国明は極めて裕福な貿易商人で、^{すうぶつ}崇仏の念と済生救民のため承天寺を建てたことが解った。石碑の右側に一軒の住宅があるが、おそらくその家の窓からは、石碑がはっきり見えるだろう。中国では住まいの近くに石碑や墓があることは、「風水がよくない」と考えているが、そのお宅で生活しているご家族は、眠っている謝国明のそばにいることに、逆に親しみを持って見守っているのかも知れない。

謝国明は中・近世博多文化の展開に重要な役割を果たしたのである。現代でいえば国際的な大貿易商社の代表である謝国明が拠点としていた博多は、商都の域を越えた「開かれた国際都市」であった。今でも博多の人々は、毎年8月21日に、彼の命日には、その徳を偲び「千灯明祭」を行い、謝国明に感謝の気持ちを捧げ、彼を偲んでいる。

「謝国明遺徳顕彰慰霊祭」（大楠様千灯明祭）は承天寺境内で行なわれている。祭りは約700年前に始まったとされ、周辺住民を中心に続けられる伝統行事である。住民の減少で行事の継続が危ぶまれる中、元住民やボランティアらの協力存続しているという。博多の町民が、七百数十年間、謝国明のお墓を大切に祀っている。

終わりに

中日の過去の歴史において、金印や遣隨・唐使、民間交流に盛んだ輝く黄金時代もあったが、不幸な対立時代もあった。第二次世界大戦以来、既に半世紀以上が過ぎ、やっと平和な時代に入ったが、戦争で残った傷跡の痛みが時に噴き出し、人々に悪夢のような記憶を喚起させてしまう。両国の国民は共に戦争の残酷さや、苦難、家族との別れの辛さを経験して来た。このような歴史を二度と繰り返さないように、歴史を鑑とし、過去をつぶさに見て、今後の戒めとすることは我々の使命であるだろう。今日、この二千年に及ぶ中日間の交流の成果は、沢山の有志が命をかけた努力の結晶である。

国際的な大貿易商社の代表である謝国明。彼が拠点を設けた博多は、商都の域を越えた「開かれた国際都市」であった。2001年のNHK大河ドラマ「北条時宗」が放送され、一躍全国に知られるようになった。「北条時宗」で、中国・宋時代の貿易商人・謝国明を演じた俳優の北大路欣也さんが、福岡市博多区の承天寺を訪ねて、遠く13世紀頃の博多を偲んだこともあった。ドラマの中での重要な登場人物である謝国明は、博多を拠点にして活躍した。そのため、ドラマでは博多の町が度々登場している。また、謝国明は、中世、博多の繁栄を支えた人物として、今も博多の人々に慕われている。

「歴史を鑑とし、未来に向かう」を基礎として、両国の友好関係をどのように守り、発展させていくかということは、永久に両国人民のため、アジア、ひいては世界の平和と繁栄のために大切である。歴史、現在、そして未来を見据え、両国の交流の歴史を回顧し、更に一歩進め、中日ニュースメディアの友好協力を高め、両国民の相互理解と信頼を増し、今世紀において、新たな国際交流を促し、両国民の後世にわたる友好という長期的な目標のために、ともに努力していくことを心か

ら望んでいる。

注

- 1, 西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部『福岡県百科事典』西日本新聞社 1982年
- 2, 『宋史研究集』 P.165 国立編訳館出版 1990年
- 3, 広渡正利『博多承天寺史』, 福岡県文化会館編『万松山承天寺所蔵品目録』, 同編『博多承天寺展図録』(吉川弘文館『国史大辞典』川添昭二氏)
- 4, 年森克巳『日宋貿易の研究』 P.87 国立書院 1948年
- 5, 『鴻臚館』福岡シティ銀行 1988年
- 6, 田中建夫『中世海外交渉史の研究』 P.112 東大出版社 1959年
- 7, 武野要子『博多の豪商』 P.18~19 葦書房 1980年
- 8, 古田紹欽『栄西一興祥護国論・喫茶養生記』 P.21~24 講談社 1994年

(さい しゅくふん : アジア文化学科 教授)